

令和7年度
「少年の主張大分県大会」
発表記録集



大分県青少年育成県民会議
国立青少年教育振興機構
大 分 県
大分県教育委員会

はじめに

昭和54年、国際児童年を記念してスタートした「少年の主張」は、中学生が広い視野を養い、物事を論理的に考える力を身につけることを目的に開催され、今年で第47回目を迎えることができました。

今年も県下の中学校22校から1,521作品もの応募があり、テーマは、自らの体験を基にした地域への思い、自らの挑戦、人権や社会問題への考察など多岐にわたっており、中学生の皆さんが日常的に様々な事柄に深く考えを巡らせていることに改めて感動を覚えたところです。

8月29日に別府市で開催された大分県大会では、約300人の観客が見つめる張り詰めた空気の中、1次、2次審査を経て選ばれた10人が少年・少女らしい飾り気のない言葉で堂々と主張し、観客の共感と感動を集めました。

最優秀賞に選ばれた島村音羽さん（竹田市立竹田中学校）は、その後の九州ブロックでの審査で努力賞を受賞するとともに、大分県青少年健全育成大会では約120人の参加者の前で力強く発表し、大きな拍手が送られました。

この発表記録集には、県大会出品の10作品と全国大会での内閣総理大臣賞受賞作品を収録しています。多くの皆様にご覧いただき、青少年に対する理解を深めていただくとともに、今後、健全育成に取り組まれる上での参考にしていただければ幸いです。

結びに、本大会を開催するにあたり、ご支援、ご協力をいただきました別府市教育委員会をはじめ、各中学校の先生方、審査委員の皆様、その他関係の皆様方に心からお礼を申し上げます。

令和7年12月

大分県青少年育成県民会議

会 長 佐 藤 樹 一 郎

目 次

〈県大会発表作品〉

最優秀賞	逃げた先に見えた夢	3
	島村 音羽 竹田市立竹田中学校3年	
優秀賞	私の大切な一步	4
	小野 ソフィヤ 別府市立北部中学校3年	
優秀賞	当たり前なのは特別なもの	5
	亀井 美咲 臼杵市立西中学校3年	
優良賞・ 大分県教育長賞	「かわいそう」という名の偏見	6
	後藤 葉日 別府市立朝日中学校3年	
優良賞・共感賞	魔法使いと日記	7
	明石 結宇 大分県立大分豊府中学校3年	
優良賞	「ありがとう」の反対	8
	小野 凌佑 宇佐市立院内中学校3年	
優良賞	愛と勇気をもって	9
	藏下 祥貴 宇佐市立宇佐中学校3年	
優良賞	大切な存在	10
	酒見 華望 竹田市立竹田中学校3年	
優良賞	二つを知る	11
	佐藤 大樹 別府市立別府西中学校2年	
優良賞	「受験生毎日3時間勉強」は嘘か	12
	中嶋 葵生 佐伯市立佐伯城南中学校3年	

〈全国大会発表作品〉

内閣総理大臣賞	伝える	13
	谷口 鉄馬 鳥取県鳥取市立桜ヶ丘中学校3年	
講 評	14
佳作入選作品	17
大会のようす	18
実施要綱	20
審査基準	21
選考経過	22

(大会発表の作品は、原文の誤字・脱字の修正以外、大会当日の発表を文字にして掲載しました。)



逃げた先に見えた夢



竹田市立竹田中学校

3年 島村音羽

「逃げるのは、悪いことなの？」

これは、私がずっと自分に問い続けてきた言葉です。私は小学生のころ、何もかも完璧に成し遂げたいと思っていました。勉強では良い成績を取りたい、友達には嫌われたくない、先生には「優秀な子」と思われたい。そうやって、時には自分に無理をさせながら頑張り続けていたのだと思います。

しかしある日を境に、私の生活は一変しました。目の前が急に真っ暗になり、手足が攣って動かなくなり、気づいたら病院にいました。診断名は「起立性調節障害」そして「過換気症候群」。何かを始めようとしても、止まらない手の震え。発作の度に聞こえる自分の存在ごと否定される幻聴。この世界からいなくなった方が楽になれる。そう何度も感じました。その日から自分を責める日々が続きました。

「頑張りたいののに、頑張れない。」

それが当時の私にとって一番つらいことでした。学校を休むようになってからも、自分が逃げているように感じていました。朝起きれないことはもちろん、ご飯もろくに喉を通らず、何に対してもやる気は起きませんでした。身体は生きているのに心は死んでいくようで、どんどん孤独は重くなりました。

そんな私に、母がかけてくれた言葉があります。それは、「逃げることは、悪いことじゃないよ。自分の身体と心を守ることは、生きていくうえでとても大切なことなんだよ。」という言葉です。かけてもらった瞬間、心が救われた気持ちになりました。私は私のままでいい、そう思えたからこそ、徐々に自分と向き合う時間がとれるようになりました。

その中で、「なぜ体はこんなふうに対応するのだろう？」と、体の仕組みや薬の働きに自然と興味が湧くようになりました。体調が悪いときに薬を飲むと、少しずつ楽になっていき、薬には人を助ける力があるんだと実感しました。薬という手段で人に希望や救いを届けられる薬剤師という職業を知り、「私もこうなりたい」と強く思いました。この気持ちは病気になって得られたものの一つです。

そして、もう一つ得たものがあります。それは「辛い人の気持ちに敏感になれたこと」です。元

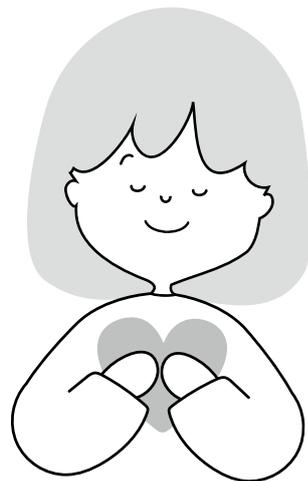
気だった頃の私は、体調が悪くて休んでいる友達にどう声をかければいいのか分からず、正直どこかひとりでして。でも今は、目に見えない不安や苦しさを抱えている人にそっと気づけるようになったと思います。辛いときは側にいてくれる人がいるだけで、少し心は軽くなります。だからこそ、私もそんな人を目指すようになりました。

今でも過換気症候群による発作や、幻聴は完全にはなくなりません。しかし私は、「一度立ち止まる。」という選択肢を知っています。もし、あの時「逃げるのは悪いことだ。」と無理を続けていたら、私は身体も心も深く傷ついていたかもしれません。そして、薬剤師という夢にも、人の痛み気づける自分にも出会えなかったと思います。

逃げることは「おわり」ではありません。それは、自分を守り、新しい自分と出会うための「はじまり」なのです。もちろん、何でもすぐに諦めて逃げるのではなく、「今の自分にとって必要なことは何か。」を考えることは大切です。でも、「逃げる＝悪」と決めつける必要はありません。

「逃げてもいい。あなたがあなたを大切にすることは、何よりも意味があることだよ。」そう、過去の私に、そして今、同じように苦しんでいる誰かに伝えたいです。

私は、薬剤師になるという夢を胸に、少しずつ前に進んでいきます。逃げたことで広がった視野と深まった心。それが、私の未来を創っていきます。





別府市立北部中学校

3年 小野 ソフィヤ

私の母はウクライナ人で、私がまだ6歳の時に一度だけウクライナに連れて行ってもらったことがあります。そこでたくさんの友人ができ、言葉が違って心を通じ合えることを知りました。一緒に遊んでくれたり、ウクライナのことをたくさん教えてもらったりしたことは今でも忘れられません。美しい街並みや緑あふれる公園などの中で過ごすウクライナの人たちの美しい暮らしを身をもって感じることができました。私は日本出身ですが、ウクライナは私にとって、もう一つのふるさとのような場所です。だから、大人になったときに、また必ず大好きな友人やウクライナの料理、そしてウクライナの素敵な景色に会いに行きたい。その時には、家族や日本の友人も連れて行って、美しいウクライナを見せたいと思っていました。

しかし、ある日ニュースで「ウクライナ侵攻が始まった」と知りました。テレビに映る建物のがれきや泣いている子どもたちの姿を見て、胸が締めつけられるような気持ちになりました。もしかしたら、あるとき出会った友人もつらい思いをしているかもしれない。ウクライナで見た美しい街並みや風景が破壊されてとても悲しんでいるかもしれない。そう思うと、何もできない自分にとっても悔しさを感じました。日本にいる友人や同級生はウクライナのことを遠い国だと思っているかもしれませんが、私にとっては、母の祖国であり、どうしても遠い国だと思えませんでした。

でも、私は気づいたのです。「何もできない」のではなく、「まだできることを見つけていない」だけなのだ。実は、私の母と父は、家を失ったウクライナ人を日本で受け入れ、自分たちのお金や時間を使って、生活の支援をしています。見返りをもとめず、静かに行動し続ける両親の背中を見ながら、私も自分に何かできることはないかと考えるようになりました。そこで、まず学校の友人にウクライナで起きていることを話してみました。最初は困惑されたり、理解してもらえなかったりしましたが、話していくうちに事態の深刻さを理解してもらえるようになりました。また、ウクライナへの募金活動があると聞いたときは、少しでも役に立てたらと思い、お小遣いを出しました。家では、母や祖父母にウクライナ語を習い、日本に避難してきたウクライナの方と少しでも会話できるように努力しました。そうして、避難民

の方と少しずつ話せるようになると、最初はとても悲しい表情をしていましたが、少しずつ笑顔を見せてくれることが増えていきました。また、避難してきた小さな子どもたちと遊ぶこともあります。日本のことがとても大好きなようで、日本の遊びや食べ物なども気に入ってくれました。私と同じ年くらいの子は日本語が好きなので、避難して半年くらいで日本語で会話できるようになりました。日本語は難しいと思うのに、本当にすごいと思いました。とても辛い状況の中、日本に来ているのに、自分にできることを頑張っているその子たちの姿から、私もパワーをもらいました。

避難民の方たちは、涙を流しながら私の両親に感謝を伝えてくれました。その時は、私までうれしくなりました。将来、尊敬する両親のように、つらい状況や苦しんでいる人々を支援する活動に携わりたいと思っています。

私はまだ中学生で、大きなことはできないかもしれませんが、「知ること」「伝えること」「助けようとする気持ちをもつこと」は、今の私にもできる大切な一歩だと思います。これからも、自分にできることを考え続け、行動していきたいです。避難民の方たちや大切な友人たちが笑顔をやさず、安心して生活できる日がくることを心から願って……。



当たり前前ものは特別なもの

白杵市立西中学校

3年 亀井美咲



「えーっ、白杵が消滅してしまう！」

2050年までに子どもを産む中心になる若年女性人口の減少が、50%を超えると予想される自治体のことを、「消滅可能性自治体」というのだそうです。私の生まれ育った白杵市もその一つに挙げられています。

本当にこのままでは、将来白杵市はなくなってしまうかもしれない。それは嫌だ。白杵市を消滅させないために、私たちにも何かできることはないか。この思いから、私たちの総合的な学習の時間の取り組みが始まりました。

私たちは学年で何度も話し合い、10月に行われる修学旅行の一日自主研修で、「白杵の魅力」を他地域に住む方に発信しよう決めました。私たちの発信をきっかけに、白杵市に興味を持ち、観光に來たり移住したりする人が、少しでも増えてほしいと思ったからです。

白杵の魅力を最大限に引き出し、短時間でわかりやすく伝えなければならない—そのために、「食」「観光・祭り」「歴史」に分かれ、まずは私たちが白杵のことをしっかり学ぶことから始めました。準備を進める中で私たちの「当たり前」が、他の地域の「特別」になることに気づきました。例えば、私たちの町は、醸造業が盛んです。地元の人にとっては、「いつもの味噌」ですが、他の地域の人にとっては、その伝統的な製造や麴の香りが立つ豊かな風味などは、とても珍しく感動するものだと知りました。味噌ソフトや醤油ソフトは珍しく、地元の人々の工夫を感じ、食べてみたくさうです。私は、自分の町に対する誇りを、これまで以上に強く感じるようになりました。今まで当たり前だと思っていた景色や文化、そしてそこに住む人々との触れ合いが、どれほど価値のあるものなのかを再確認することができたのです。だから自信をもって白杵の魅力、を、他地域に住む人たちに伝えたいと思いました。

実際に紹介するとき、言葉だけでは限界があると思い、短い動画を編集し、市役所の産業観光課の方にアドバイスをもらいました。私はその動画のナレーションを担当しました。どんな方に見ていただけるのだろうか、ワクワクしました。班で話しかけ方や役割を決め何度も練習しました。

「すみません、私たちは大分県の白杵市から来た中学生なのですが、少しお話いいですか。」私

の班も京都の八坂神社で、2組のグループの人に話かけました。知らない人に話しかけるのは、とても緊張しました。「うすき竹宵ってきれいだね、ぜひ行ってみたい。」「ここからだったら、どうやって白杵に行けるの。」という声を聞くことができたときの喜びは、何事にも代えがたいものでした。班のみんなも興奮していました。

今回の経験を通して、私は「白杵の魅力を他地域の人に伝える」という活動は、単に情報発信をするだけでなく、自分自身の住んでいる場所を見つめ直し、未来を創造していくプロセスなのだと感じました。白杵の魅力を探究し、情報を整理し、まとめ、発信することができたのも、仲間と共に活動できたからです。これからも、私は白杵の一員として、自分の町を誇りに思い、その魅力を多くの人に伝えていきたいです。そして、私と同じように、この町を愛し、未来を考える仲間と共に、この町が更に輝くために何ができるか考えていきたいです。





「かわいそう」という名の偏見



別府市立朝日中学校

3年 後藤葉日

「耳が聴こえません。」「目が見えません。」そんな人に出会った時、あなたはどのように感じますか。多くの人が、まず一番最初に感じるのは「かわいそう」という同情の気持ちだろうと思います。しかし、それは本当に「かわいそう」なことなのでしょうか。

私は、生まれつき右耳が聴こえません。しかし、左耳には聴力があります。他の人よりは聴こえが悪くても、日常生活は何不自由なく送ることができています。そんな私のことを知って「かわいそう」という人もいれば、失礼なことを聞いてしまった時のように、気まずそうにする人もいます。私が出会ってきた人たちの多くがそんな反応をしました。優しさや思いやりの気持ちからくる言動なのだろうと思います。しかし、私はそれに対して複雑な気持ちを抱えていました。

世の中には、何らかの理由で体の一部や機能を失ってしまった人が多くいますが、私の場合は生まれつきです。そのため、両耳で音を聴くという感覚は分かりません。それでも、友達と歌を歌ったり、ピアノを弾いたり、身の周りにある色々な種類の音を感じ、楽しむことが大好きです。そのため、右耳が聴こえないからという理由だけで、「かわいそう」と言われると、私の生活は、楽しさのない悲しいものだと思われたい気がしました。

そして、「私はかわいそうな人間なんかじゃない。」そんな反抗の心を、いつしか抱くようになりました。

ある時、母に仕事のことについて聞いたことがありました。母の仕事は、障がい者と関わる機会が多い仕事です。そんな仕事をしている母自身は、どんな思いを持っているのかとても気になっていたのです。私の質問に対して、母は色々なことを話してくれました。その話の中で、体を思うように動かせない私と同年代の女の子がいることを知りました。その子がどんな子なのか、全く知りませんでした。私は無意識のうちに、「かわいそう」と思っていました。自分があれほど嫌だった思いを、簡単に他人にも抱えてしまったことが、とてもショックでした。そこで、私は重ねて母に聞きました。

「その子のこと、かわいそうだって思ったことがある?」

すると母は答えました。

「そんなこと一度もないよ。何が幸せかは人それぞれだからね。その子は、人と話すのが大好きな、笑顔が素敵な子だよ。」

人に寄り添う優しい心を持ちながら、世の中の価値観にとらわれず、別の視点から物事を考えることのできる母の言葉は、私の中であたりまえになっていた常識や価値観を、考え直すきっかけになりました。

この時から、私は心に決めたことがあります。それは、相手の立場に立って物事を考えるということです。これは単に相手の言っている事を受け入れるだけではなく、相手の背景や感情、今置かれている状況を想像する努力をすることでもあります。自分とは違う価値観を持つ人、自分には理解できない考え方の人に対してこそ、その想像力が試されるのだと思います。

これからの社会は、年齢、性別、国籍、障がいの有無などに関係なく、共に協力し合って生きていく時代です。優しさのつもりで言った言葉が、誰かを傷つける凶器となることもあります。

「かわいそう」と思う前に、その人がどんな思いを抱き、どのように生きているのかを知ろうとすること。その意識こそが、誰もが自分らしく生きられる社会をつくる鍵になると、私は信じています。





魔法使いと日記



大分県立大分豊府中学校

3年 明石結宇

あの日、自分を知った。ブスだと貶されている自分を知った。悲しくて、悔しくて、認めたくなかったけれど、これが現実だった。呪いがかかった気がした。

私には大切な人がたくさんいる。その内の1人に最近会話がごちなかつた子がいた。私は、悩みを抱えているのではないかと思って2人で遊びに行った時に直接聞いた。私のせいで悩んでいるのかと思うと怖かった。

「何か言うことない?なんでもいいよ。」と自分を励ましながら、相手に笑顔で聞いた。しばらく悩んでいたけれど、私が懇願すると相手は悲しい表情で教えてくれた。内容は、相手の友達が私のことをブス、可愛くないと言って、自分のことも私の友達というせいでいじられているというものだった。私は、「そうなんだ。私は大丈夫。それより、ごめんね。私のせいでいじられるなんて。」と言った。強がった。大丈夫じゃなかった。何より大切な人が私の顔で、体で傷つけられているのが耐えられなかった。自分は可愛くないと分かっていたけれど、自分にしか言われたことがなかった。他人から言われたのは初めてでショックだった。

その日からみんなが怖くなった。大好きな家族も友達も先生も私のことを醜い人だと思いながら接しているのかと思うと、視線が痛かった。少し下を向いて生きるようになった。友達からの褒め言葉は、素直に受けとれなくなった。写真を撮られたり、人前でマスクをとったりできなくなった。そうやって生きていたら、他人をひどく羨ましがらるようになった。特に、妹に対してだった。今思うと妹は母によく可愛い可愛いと言われていたと思う。私は大事にされていたと思うけれど、可愛いと愛でられることは少なかった気がする。妹が褒められるたびに、いいなあ、私も言われたいなあと渴望した。あるとき、母は私に妹に比べて魅力がないと遠回しに言った。母にそんなつもりはなかったと思うけれど、私にはそんなふうには聞こえなかった。愛想笑いをして母の前から立ち去った後、自分の部屋で布団に縋りついて泣いた。味方が欲しくて、ちゃんみなさんの「美人」を聞きながら泣いた。妹が憎かった。それに加え、妹は何も悪くないのに、勝手に恨んでいる自分が醜くてたまらなくて、涙が止まらなかった。

妹への嫉妬を日記に書いた。私と担任の先生しか読まない日記に書き殴った。涙を拭きながら、必死こいて思いと欲を綴った。神社でお参りをするような気持ちで、この日記を提出した。怖かったけれど、不思議と救われるような気がした。

その日の放課後、日記が返ってきた。自分の部屋でゆっくり開いてみるとそこには赤ペンで10行もの長文が書かれていた。驚いた。こんなに長い文章を私なんかのために書いてくれたことが本当にうれしかった。

「結宇さん、書いてくれてありがとう。」

この最初の一行で今までの自分が救われた気がした。その後の文には、先生からの共感が書かれていた。心が軽くなった。そして最後は私を肯定してくれる文だった。私は今までも頑張っていること、母はもしかしたら私の良いところを言っているかもしれないこと、そしてまたいつでも何でも日記に書いていいことを教えてくれた。日記に書いて、先生に打ち明けて心の底から良かったとおもった。

今は前より前を向いて歩けるようになった。写真を撮られたり、マスクを外したりするのは今まで通りできないけれど、少しずつ世界を楽しめるようになった。私が勝手に悪役にしてしまった家族も今では大好きだ。言葉は魔法で、それを使っている私たちは魔法使いだ。魔法は良いようにも悪いようにも使うことができる。他人からの何気ない言葉で、できなくなってしまったこと、恐怖を感じるようになったことがある人、呪われた人は私以外にもたくさんいると思う。呪いは解けなくても、呪いの上からおまじないをかけることはできる。私の場合、それは先生との日記だった。これからも呪われることがあると思うけれど、そんな呪いより強力な優しいおまじないをかけていきたいと思う。そしていつか私も先生のような優しい魔法使いになりたい。

「ありがとう」の反対



宇佐市立院内中学校

3年 小野 凌 佑

「ありがとう」の反対って何かわかる？

母が急に聞いてきた。「ありがとう」の反対など考えたこともなく、「ごめんなさいかな」と答えたけれど、違っていた。母から言われて調べてみた。すると、「あたりまえ」ということがわかった。「ありがとう」と「あたりまえ」が正反対の言葉とは驚いた。「ありがとう」と「あたりまえ」－このたった5文字の言葉には大きくて大切な意味があると思う。僕は毎日の生活の中で、どれくらい感謝の気持ちをもって「ありがとう」と言っているだろうか。そうしてもらうことが「あたりまえ」だと感じて、無機質な「ありがとう」を使っているのではないだろうか。

「ありがとう」は本来、人に何かをしてもらったときに使う、感謝の言葉だ。例えば、友だちが落とし物を拾ってくれたとき、家族がごはんを作ってくれたとき、部活動で先生がボレーの仕方をわかりやすく教えてくれたときなどに「ありがとう」と言うことができる。この言葉は、相手の優しさや行動をうれしいと思っている気持ちを伝えている。先日、クラスの仲の良い友だちが、学校を休んだことがあった。いつも一緒にいるので、その日は寂しく思っていた。それで、帰宅してすぐにメールを送ったら、「心配してくれてありがとう」と返事がきた。たった5文字なのに、僕はとてもうれしかった。一方、「あたりまえ」とは、「してもらって当然」「そうなるのが普通」という気持ちである。例えば、毎日ごはんが出てくること、先生が授業をしてくれることなどを、「普通のこと」「あたりまえ」と思っている人もいるかもしれない。僕もそんな一人だった。しかし、能登半島地震で避難所暮らしを余儀なくされていた高校3年生が大学受験を目前に控え「あたりまえの毎日と思っていたことが、実はあたりまえではなかったことに気づいた。」とインタビューで答えていた場面をふと思い出した。僕自身、生活を一変してしまうような経験はないけれど、あたりまえのことは、一つもないと思った。もしも「ありがとう」がなくなり、「あたりまえ」ばかりになってしまったら僕たちの心の中はどのようなだろうか？僕は誰かに「ありがとう」と言われると、うれしい。でも、誰かのために何かしてあげたとき相手が、「あたりまえ」としか思わなければ、自分自身のやる気はなくなりもする。そ

うなるとお互い心の中が貧しくなってしまう。母はよく「勉強はできないよりできた方がいいけど、『ありがとう』が言えない人は生きていけない。」と言う。小学生の頃は、全く言っていることの意味がわからなかった。しかし今は違う。中学3年生の今、母の言う「ありがとう」の意味をもっと深く知っていく時期なのかもしれない。勉強がわからない時や辛いことがあった時、誰かがそっと声をかけてくれたら、それだけでも「ありがとう。」と思える。僕は、そんな気持ちを大切にしていきたい。「あたりまえ」と思っていたことは、何一つ「あたりまえ」ではない。地震や津波などの自然災害。そのようなことは、自分とは関係ないと思って日々過ごしていた。安心安全な毎日を「あたりまえ」だと思っていた自分に気付いた。だから、これからは、もっと日々のあたりまえに感謝しようと思う。「ありがとう」の一言で相手も自分もあたたかい気持ちになれるはずだ。だから、僕はこれからも「ありがとう」を大切に、「あたりまえ」と思わずに、心から感謝できる人でありたい。また、自分自身も誰かの役に立ち、「ありがとう」と言ってもらえる人でありたい。それは自分にとってとてもうれしいことだ。

わずか5文字の「ありがとう」は小さな言葉だけれど、大きな力を持っている。相手も自分も心が豊かになり、人と人をつなぐ力を持っている。人は、「つながり」の中でこそ成長していける。「ありがとう」「ありがとう」「ありがとう」－「ありがとう」の響き合う社会を目指して。





宇佐市立宇佐中学校

3年 藏 下 祥 貴

「なあ、正義の戦争ってあると思う？」
突然、友達からこんなことばを投げかけられた。
「ないんじゃない？」

私は当たり前のように返す。

「じゃあ、自分の国が攻められて反撃するのは、正義じゃなくて悪になるの？」

私は答えられなかった。なぜなら今まで、「戦争は悪」「人を殺すことは悪」と教わってきて戦争を正義かどうかという視点で見たことがなかったからだ。

正義って何だろう。この事がきっかけとなって正義について考えるようになった。

まず辞典で調べてみた。その意味は「正しい道筋。人が実際に行うべき正しい道。」とあった。

しかし、全て間違えずに正しいことだけをするのは難しいと感じた。実際に完璧な人はいないし、全ての物事を正しく見ることができる人はそういない。色々考えているとき、こんなことがあった。

習い事の時に、体調が悪いからと帰った子がいた。その子は日頃からよく早退していた。周囲から「また帰った。」「どうせ仮病でしょ。」と話す声が聞こえた。

その時、「なんでそんなこというの。決めつけちゃいけないでしょ。」と注意した子がいた。言い返された子たちは互いに視線を送り合ったが、何も言わなかった。

私はこんな小さなことでも意見は対立するのだと改めて感じた。

私はどちらの気持ちも分かる。それは私も仮病かもなと思う反面、憶測で決めつけてはいけなとも思っていたからだ。

だが、この場合どちらも自分たちは、間違っていないと思っているのではないか。

同じ物事を見ている、見方によって思いや考え方が違い、意見の対立が起こる。自分の考えや思いに左右されずに、物事を正しく見る方法はあるだろうか。

もし早退した子が自分にとって気の合う友達だったなら、その子のことを悪く言うことはなかったのではないか。

好き嫌いや気が合う合わないなど、これらの感情を取り除いて物事の是非を判断できるだろうか。

私は、正義とは何なのか結論が出ないまま3年

生となり数日が経った頃、テレビを見ていてハッとした。「そうだ、正義といえばアンパンマンだ。」

それから、やなせたかしさんの本を読み、次の文章にいきついた。

「ほんとうの正義というものは、けっしてかっこうのいいものではないし、そして、そのためにはかならず自分も深く傷つくものです。」（『あなぱんまん』刊行フレーベル館・昭和四十八年出版・作者やなせたかし）

この言葉は、今から50年以上も前に書かれたものだが、私の心に強く響いた。

正義とは格好がよく、喜ばれるものだと私は思っていたからだ。しかし、やなせたかしさんはご自身の経験から「正義を行うことは自分も傷つくことである。」として顔を食べさせて、相手を助けるというキャラクターを作ったそうだ。

私は小さい頃、そんなことは考えていなかったが、正義の本質とはこの事だと思うようになった。

私たちは自らを取り巻く環境に大きな影響を受け、価値観や倫理観を育てていく。そしてそれらが人の正義をつくる。だから人によって正しさは変わる。

正しい正義を行うには、自分だけが正しいと思わず、周りの人の意見や考えを受け入れて認めることが大切であり、自分の意見や考えだけを押し通してはいけない。そして、物事をひとつの視点で見るのではなく、それぞれの立場になって考える。

正義は人の数だけある。だが、私は思う。人を傷つける行為は正義ではないと。

本当の正義とは、その時よければよいものではなく、時が経っても「その行いは正しかった」と認められるものだ。しかし、物事を判断するとき正しい行いをするのは難しい。そのためにも感情で判断せず慎重になることが大切だ。

私は本当の正義を行うのは怖いし難しいと思うが、行うことを諦める人にはなりたくない。

「そうは言っても、なかなかできることではないんだよ。」

心の中にある諦めの心は捨てよう。私たちの心掛け一つで世界が変わる。本当の正義を求めて第一歩を踏み出そう。

愛と勇気をもって。



竹田市立竹田中学校

3年 酒見華望

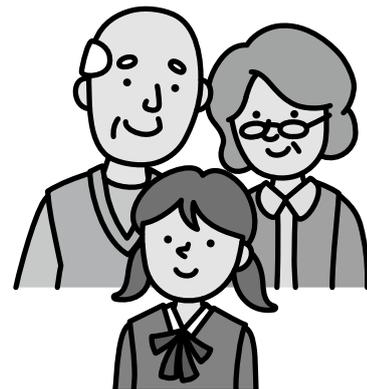
あなたにとって「大切な人」とは、誰ですか？私は、そう問われたら「親」という、生きていくには欠かせない存在を、まず思い浮かべます。でも、私には「親」がいません。

私は、幼い頃、自分を育てている目の前の2人が、父親、母親ではないことを祖母の口から知りました。幼な過ぎた私は、その事実を知っても大きな衝撃を受けることはありませんでした。なぜなら、私の傍にはいつも祖父母がいてくれたからです。

しかし、小学4年生の頃、私は、自分の家庭が皆とは違うということに気づきました。例えば、授業参観。友達のお母さんは若くて綺麗なのに、どうしてうちだけあちゃんなんだろう、なんだか恥ずかしく思えてきました。また、遠足の日、友達のお弁当はカラフルなのに、私のそれは茶色のおかずばかり。自分の心の中に何とも言えないもやもやとした気持ちが広がっていくようでした。高学年になった私は、周りと自分の家庭環境を比べイライラし、学校から家に帰ると、毎日、祖父母にきつく当たるようになりました。話しかけられても「うるさい」の一言で済ませ無視をするのも当たり前。「なんで私ばかり」と、いつも不機嫌でした。

そんな生活を送っていたある日、あんなに元気だった祖父が、咳をした後、急に倒れこんだり、食事中、よく食べ物を喉に詰まらせたりするようになりました。その姿を目にした私は「じいちゃんが死んだらどうしよう」と、不安になりました。同時に、学校の送迎、家事、生活に不可欠なお金、言い出したらきりが無いほどたくさん世話になっていたことによろやく気がついたのです。今までのように暴言を吐いて、その言葉が祖父との最後の会話になってしまったらどうしようと、そんなことを思うようになり、今までの自分の言動に憤りや後悔を感じました。「このままじゃいけない」、そう思いはしたものの、今までの自分の言動をすぐに変えることはできませんでした。それでも、日常での会話を少しずつ増やそうと祖父の言葉に耳を傾け、苛立ちを示すようなことは、決してしないよう努力しました。中学生になり、感謝の言葉を口にしたりすることで、祖父母の優しさに改めて気づくようにもなりました。次第に、以前のようにきつく当たることはなくな

り、笑顔で過ごすことが多くなったと思います。祖父の病気がきっかけでしたが、実はもうひとつ、嬉しいことがあったからです。昨年、竹田市教育委員会がマスコットキャラクターを募集しました。絵が大好きな私は竹とカボスを融合し、頭の上に大好きなイベント「竹楽」の灯りをデザインした「かんぼう」というキャラクターを描きました。なんと私の「かんぼう」は、最優秀賞となり、竹田市教育委員会のキャラクターに、決まったのです。驚いたと同時にとても嬉しくなりました。表彰式で教育長に「丸いシルエットがとてもいい。今後もっと、いろんな表情のかんぼうを見たい。」とおっしゃっていただき、私は、楽しくなっているいろんな表情の「かんぼう」を、思いを込めて描いています。そんな私を傍で見ている祖父母もとても嬉しそうです。「今日もいいことがあったのかい？いつも笑顔だね。」と言ってくれます。祖父母の笑顔も言葉も私を益々笑顔にしてくれます。今では、祖父母とずっと一緒に笑顔でいたい、ずっと元気でいてもらいたい、そう強く思うようになってきました。私の場合、祖父や祖母と共に過ごす時間は、おそらく皆さんがご両親と過ごす時間より、ずっと短いことでしょう。だからこそ少しだって無駄にしない。一日一日を大事にして、一緒にたくさん笑って、ずっと元気に過ごす。これが私の目標です。あなたにとって「大切な人」とは、誰ですか？私は胸を張って言えます。私にとっての大切な人とは、じいちゃんとはあちゃんです。ずっと大切に、ずっと一緒に、3人で笑顔で元気に過ごしていきます。





別府市立別府西中学校

2年 佐藤大樹

皆さんはインクルーシブ公園を訪れたことがありますか。インクルーシブ公園とは、障害の有無や年齢、性別、国籍などに関係なく、利用する人が楽しめる公園のことです。

僕は幼いころから遠足などで公園に行くことになっても、あまり気乗りしませんでした。なぜなら、僕は幼稚園のころから病気の影響で車椅子に乗っているからです。一般的に公園という場所はバリアフリーからは程遠く、公園に行ったとしても僕はできることはありませんでした。「大樹君はここで見学してね。」課外活動やレクリエーションのときになると、いつも先生に言われていた言葉です。他のクラスメイトが遊んでいる様子をただ座って眺めているだけでした。仕方のないこととはいえ、少し寂しい気持ちでした。

昨年、別府市でも古くなった公園をインクルーシブ公園にリニューアルしたので、僕も先日訪れてみました。まず驚いたこと、公園の入口付近にあった段差が解消されていました。そして、車椅子利用者のための駐車場が2つ新設され、公園の広場に行くまでの通路も通りやすいように平坦になっていました。他にも、自動販売機の高い位置にあるボタンの代わりに、番号で対応している低い位置のボタンを押しても買えるようになっていました。以前の公園は、遊具も古く利用者の姿もまばらで、閑散としていました。しかし、リニューアル後は小さな子供でも遊べる遊具が増えたおかげで、利用者で賑わっていました。

今、僕の体は依然と比べて、体調は少し回復しましたが、それでもバリアの多い場所に出かけることは躊躇します。特に、バスなどの公共交通機関を使った外出は不便さを感じたり、周囲へ迷惑をかけるのではないかと考えてしまい、利用することはありません。だからこそ、バリアフリーの公園ができたことにとっても興味を持ちました。このような公園があったのなら、小学校時代の僕でも、遊びに参加できたのかなと思います。

近年、バリアフリーの公共施設は多くなってきました。例えば、僕が通っている中学校にはエレベーターが完備されています。廊下はとて広く、段差も少ないです。理科室などの特別教室に移動する時に、車椅子に乗って階を移動しても不便さを感じません。物理的なバリアフリーが進むにつれて、体にハンデを持つ人たちに対する理解、心のバリアフ

リーも進んできたように感じています。クラスメイトと共に、同じ条件、同じ空間で学べるのが今の僕にとっては何より嬉しいです。そのお陰で、部活動にも参加できるようになり、小学校時代の僕よりも学校生活が充実しています。

中学校生活はこのまま安心して過ごすことができそうな僕ですが、まだ不安な部分は残っています。それは高校などの進路選択についてです。高校で僕のような少しハンデのある生徒を受け入れてくれる場所があるのか、まだ分かりません。

僕には将来具体的にやりたい職業というものはありませんが、どういった大人になりたいか、という目標ならあります。

幼稚園のころから約8年間車椅子に乗っている僕から見て、バリアフリーな施設を利用する際に、もっとこうなればいいのに、と思うことが多くあります。例えば、多目的トイレの扉が重く、筋力の弱い僕のような人には開け閉めに苦勞すること。車椅子利用者のための駐車場も、コーンで場所取りがされているケースでは、車を停めるときに一度降りてコーンを動かす必要があるのも、逆に不便であること。スロープがあっても、距離が短いために動線が確保できていなかったり、傾斜が急すぎたりして、自走するのは難しいことが挙げられます。これらのことから、僕は実際にその境遇になったからこそ分かることがあるのだと気づきました。

今現在、体調は少しずつ、着実に良くなってきています。もしかしたら、この先健康的ないわゆる「普通の大人」として社会に出られるかもしれません。しかし、これまでの自分のできなさに対する葛藤と、そんな僕に手を差し伸べてくれる周囲の暖かさを忘れないで生きていきたいです。

病気になって良いことなんてありません。幼い頃から病気の治療を続けているので、体が不自由な期間がとて長く、今までを振り返っても、諦めや思い悩む経験が多くありました。この気持ちは、これから先、一生忘れることはないでしょう。ただ、その中から学べることもありました。僕はこれまで多くの人に支えてもらえました。人に支えてもらえる有難さ、理解してもらえる嬉しさを知りました。将来車椅子を卒業したとき、僕は僕のような体にハンデのある人に寄り添える大人になりたいです。

「受験生毎日3時間勉強」は嘘か

佐伯市立佐伯城南中学校

3年 中 嶋 葵 生



春に高校入試を控えている受験生のみなさん、昨日何時間勉強しましたか。突然そんな切ない質問をしないでくれ、と思う人もいると思いますが、受験生たるもの、毎日勉強しなければなりません。なぜ、みなさんにこのような質問をしているのか。時は2ヶ月前までにさかのぼります。定期テストが終わり、ダラダラとSNSを徘徊していた私の目に、「偏差値50の生徒が偏差値60の高校を受験するなら、毎日3時間勉強は当たり前」という文章が飛び込んできました。この文章を読んだときの私の気持ちはただ一つ、誰か嘘だと言ってくれ、でした。というのも私は、偏差値60をはるかに超えた学校に進学したいと考えているからです。

それをふまえて、今回私が話すテーマは、「受験生毎日3時間勉強は嘘なのか。」です。

早速、インターネットを使い調べてみました。ある塾が2024年7月、約3百人の10代男女へ、中学生時の学校以外での1日あたりの勉強時間を尋ねたところ、トップ校を目指す中学3年生の1学期の勉強時間は2~3時間、夏休みは1日3~4時間という結果が、別の塾のホームページでは偏差値を10上げるには、1日4~5時間の勉強を3~6月続ける必要がある、と記載されていました。つまり、偏差値50を60まで上げて、かつ余裕をもって合格するには、毎日約5時間の勉強が受験当日まで必要だ、ましてや、偏差値が60以上の高校へ進学したいと思っている私は、その倍の量をこなさなければならないのです。

ここで一つの疑問が生まれました。トップ校を目指す人が5時間勉強するとして、どのようにして周りとの差をつけているのでしょうか。毎日5時間勉強するなら、すぐにまわりと差をつけて、合格への道を進みたいものです。そこで私が見つけたのは「1日の学習時間が長くなると学習効率が低くなる」というある塾の統計結果です。折れ線グラフを見ると、勉強開始から、20分を過ぎたころ、どの教科も学習効果が、低下していくのが、分かりました。つまり、1日長時間勉強をしても、常に効率よく頭に入るという訳ではないのです。そして、そのグラフを更に細かく教科別に見てみると、約80分学習をした場合、数学→理科→英語→社会の順番で学習効率の低下の幅が大きいくことが分かりました。1日複数の教科を勉強する

時は、理系から勉強した方が効率よく学習できそうです。サイトや本によって内容に違いはありますが、教科ごとの効率の良い勉強法を知り、自分に合った方法で勉強すると、比較的是やく効果を感じることができるのではないのでしょうか。

偏差値を50から60に上げて、かつ、余裕をもって受験に合格するには、毎日5時間、効率のよい勉強を受験当日まで続けなければなりません。

「毎日3時間でも精一杯なのに、5時間だなんて。」と絶望している人も多いのではないのでしょうか。もちろん、私もその1人です。高校に入学することが人生の最終的なゴールでは無いですし、毎日効率よく、5時間勉強するなんて、想像するだけで、心が折れてしまいそうです。私は、今回の結果が分かった時は、別のサイトを探して、楽な道を見つけようともしました。しかし、どのサイトでも5時間はあたりまえですし、それを大きく上回った時間を示しているグラフもありました。本当に、5時間勉強したら、あの高校に合格するの、と疑いたくなる私もいました。

そんな事を母に話したら、

「今は辛いと感じることで、その目標がかなえば、あの時頑張ってたよかったなと思える日が必ず来る。受験でつちかった計画性や忍耐力は大人になった時に役立つし、支えになるよ。」

と、という言葉が返ってきました。毎日5時間と聞くと、大変に感じますが、例えば、1時間勉強20分休憩を5回、すき間時間を見つけて勉強した合計が5時間でも、同じ5時間です。自分の工夫や考え次第で、しかたなく終わらせる5時間を、進んで達成した5時間に変えることができるのです。試行錯誤して身につけた学習習慣は、これからの人生の宝物になることでしょうか。そう思うと、自分でもできそう、頑張りたいと希望が生まれてきませんか。

しかし、どんなに明るく見えても、毎日3時間以上勉強しなければならない、という残念な事実は変わりません。みなさんも、進路に向けて1日5時間勉強を取り入れてみてはどうでしょうか。

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校

3年 谷口鉄馬

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は「鉄馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっでごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうにお金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学1年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。



審査委員長 内海 真理子

皆様、こんにちは。審査員を代表し、私から第47回少年の主張大分県大会の講評を申し上げます。SNSの発達した現在では、自分の意見を手軽に社会に広く発信することが容易になりました。自分の意見を多くの人に聞いてもらえる、見ず知らずの人の意見を受け止め、時にはそれが活力や生きるヒントとなる、これは喜ばしいことですが、同時に根拠の不確かな無責任な主張や、感情に任せた攻撃的な意見、多様性への配慮に欠け、読んだ人を傷つける意見も少なくありません。言葉があふれているのに、言葉を信じるのが難しい時代を、今私たちは生きています。

そのような中、本日10名の方の発表をお聞きし、私は言葉の力を信じる気持ちを蘇らせることができました。その理由を二つお伝えします。

一つ目は、皆さん方の主張が、どれも体験をもとに丁寧に紡がれたものであるということです。自分の境遇やつらい出来事から目を背けず、しっかりと見つめ、そこから新しい自分を見出していく姿に心打られました。また、家族や身近な人の言葉を素直に受け止め考えをめぐらし、自分の生き方につなげていこうとする姿には、誠実さと中学生らしいすがすがしさを感じ感銘を受けました。体験を通して得られた思いや考えはその人ならではのものであり、個性が光るかけがえのないものです。そして説得力があります。説得力のある主張は聞いている人に新しいものの見方、考え方、挑戦意欲、自己肯定感を促す力にもつながっていきます。皆さん方の今日のご発表が、ご自身の成長につながるだけでなく、多くの人を突き動かす可能性を秘めているのです。ここに言葉の力を感じました。

言葉の力を感じた理由の二つ目は、それぞれの主張が皆さん方ご自身の声によって伝えられたということです。音声言語は感情を乗せて発せられ、書き言葉とは異なる感じ方を人にもたらしめます。自分の思いを伝えたい、わかってもらいたいという願いを持って何でも話し方の練習をしたことでしょうか。言葉の選び方、ちょっとした間の取り方、声の表情、そして身振り手振り、今日会場の皆さんは、発表者の言葉の響きから心の響きも受け止めたはずです。そこから一層強い共感が生まれたのではないかと思います。

ここで、10名の方の主張について、私の感想を少しお伝えします。発表順に、

- 後藤葉日さん。相手の立場に立って物事を考えるこれはよく言われる言葉ですが、ご自身の体験やお母さんとの会話をもとにかわいそうという言葉に潜む偏見に気づき、自分の中の常識や価値観を見直そうとしたこと、相手の背景や感情を想像し、知ろうとする事の大切さを伝えた意見は大変説得力がありました。
- 中嶋葵生さん。勉強自体に必要な時間、受験勉強に必要な時間効率的な勉強方法について、インターネットを駆使し、情報を比べながら自分の考えを構築していく姿にたくましさを感じました。これからの受験勉強で培われる計画性や忍耐力が、あなたの夢の実現にきっと役立つことでしょう。
- 島村音羽さん。逃げることは終わりではなく、自分を守り新しい自分に出会うための始まり。あなたのこの言葉に救われた人が、この会場にもいたかもしれません。頑張りたいのに頑張れない、辛い時間の中で見出した言葉は、多くの人々の心に響いたに違いありません。

- 小野凌佑さん。安心安全な毎日、家族や友人からの心遣いを当たり前と思っていることが私にもあります。お母さんの言葉から、当たり前で感謝することを学び、ありがとうの言葉の力や人とのつながりを考えていく姿には、中学生らしい素直さと誠実さを感じました。
- 明石結宇さん。言葉が持つ残酷さと同時に、傷ついた心を救うのもまた言葉であることを、言葉は魔法だという印象的なフレーズで伝えてくれました。言葉の持つ重みと、その使い手としての在り方を深く考えさせられました。私たちも、優しい魔法使いになりたいですね。
- 酒見華望さん。おじいちゃんの病気をきっかけに、おじいちゃんおばあちゃんから、これまでたくさんの愛情を受けて育ってきたことに気づいたこと、感謝の言葉を口にすることで、おじいちゃんおばあちゃんの優しさを一層感じていることが、素直にみずみずしく語られました。ご家族にとって、あなたは大切なご自慢のお孫さんだと思います。
- 藏下祥貴さん。友達からの質問をきっかけに、本も参考にして正義について深く考えました。正義は人の数だけあるけれども、人を傷つける行為は正義ではないという、自分なりの考えを見いだすことができました。難しいテーマを真摯に追求していく姿勢を、これからも持ち続けてください。
- 小野ソフィヤさん。連日報道される紛争や戦争状態の地域に住む人々の姿、それを目にしいたたまれなさや、無力さを感じている人は少なくありません。自分にできることを見つけ、見返りを求めず、小さな一歩を重ねていくことが、国際社会に貢献する人々を幸せにする、大切な歩みなのだと教えてくれる力強い考えさせられる発表でした。
- 佐藤大樹さん。自分の境遇を冷静に受け止め、周囲の人に感謝しつつ、将来は自分だからこそ築ける視点を生かして、ハンディキャップのある人に寄り添いたい力強い目標が表明されました。バリアフリーの社会づくりのために、今後も積極的に発信してくれることを期待しています。
- 亀井美咲さん。ふるさとが消滅してしまうかもしれないという危機感をもとに、臼杵市の魅力を修学旅行先で発信しました。その取組の過程で、気づいた故郷の魅力価値を再認識し、地域の未来を創造しようとする、あなたは地域の大人にとっても大変心強い存在に違いありません。発表態度もとても堂々としていました。

いずれの発表も伝えたいことが明確で、構成や演題にも工夫がありました。話し方も含め、日頃の学習の成果が表れており、ご指導された先生方のご労苦が実を結んだ時間でもありました。熱心に主張に耳を傾けてくださった、別府市立別府西中学校の生徒の皆さん、そして、関係者の皆様、大会の素晴らしい空気を一緒に作ってくださったことに、心から感謝申し上げます。ありがとう。本日の10名の発表者と会場の中学生の皆様の明日にエールを送ります。誠実に、そして逞しく未来を切り開いていくことを期待し、講評といたします。



中学生審査委員長
日出町立日出中学校
3年 末 房 宏 太

10名の発表者の皆さん、とてもすばらしい発表をありがとうございました。どの発表も、自分の伝えたいことが伝わるすばらしいものでした。

それでは、共感賞を発表します。

中学生審査委員5名で慎重に審査した結果、共感賞は「魔法使いと日記」という演題で発表した大分県立大分豊府中学校の明石結宇さんに決定しました。

明石さんの主張を聞いて、自分の辛い過去を日記でのやり取りをきっかけに、前向きな気持ちになり、乗り越えようとしている姿が伝わってきました。

また、他者からの言葉は、捉え方によって呪いにもおまじないにもなるという考えに共感しました。

そして、自分の悩みを誰かに打ち明けることは、とても勇気のいることだと思います。

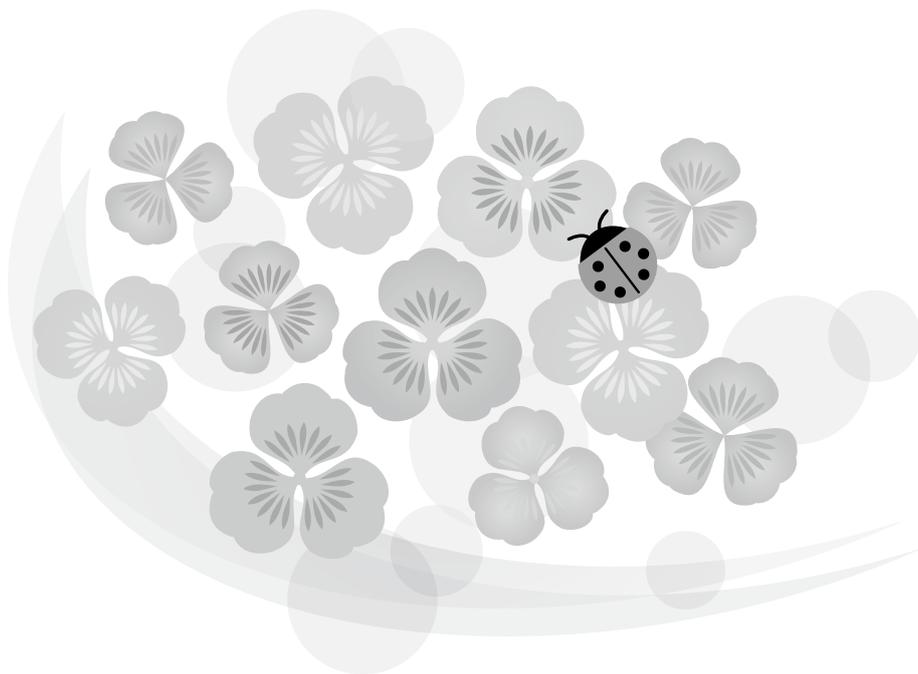
明石さんの主張を聞いて、私たちも勇気をもらい、もっと多くの中学生に聞いてほしいと思いました。

他の皆さんの発表にも多くの共感を得ることができ、また、たくさんのことを学ばせてもらいました。大変ありがとうございました。



佳作入選作品

- | | | |
|-----------------|--------|----------------|
| ● チャレンジする私 | 穴井 美楽 | 玖珠町立くす星翔中学校 2年 |
| ● 今、そして未来を変える | 岩武 なほか | 宇佐市立北部中学校 3年 |
| ● 僕は、私は、不登校です | 運天 貫太 | 竹田市立竹田中学校 3年 |
| ● 反抗期が終わるまで | 大塚 史翔 | 竹田市立直入中学校 3年 |
| ● 果たさなければいけないこと | 香下 彩葉 | 宇佐市立院内中学校 3年 |
| ● 「不登校」って何？ | 古賀 朝陽 | 豊後高田市立田染中学校 2年 |
| ● 日本の食料自給率 | 呉屋 潮音 | 日田市立津江中学校 2年 |
| ● 私の夢 | 簗戸 紗来 | 佐伯市立直川中学校 2年 |
| ● 私と日本舞踊 | 中村 日彩 | 佐伯市立東雲中学校 3年 |
| ● 話してみる勇氣 | 中村 友希乃 | 日田市立津江中学校 1年 |
| ● 協力できる世界になれば | 朴 一豪 | 別府市立中部中学校 3年 |
| ● 父の言葉 | 馬場 香羽 | 竹田市立直入中学校 3年 |
| ● 無意識な差別 | 深川 花心 | 大分県立大分豊府中学校 3年 |
| ● 素直に言いたいあのことば | 吹田 紗雪 | 佐伯市立昭和中学校 3年 |
| ● きっといつかは | 森 夢果 | 別府市立北部中学校 3年 |
| ● 水泳を世界へ | 森崎 彩 | 佐伯市立東雲中学校 3年 |
| ● 生徒会長になって | 安岡 緋より | 日田市立津江中学校 3年 |



大会のようす



内海審査委員長による講評



中学生審査委員から
共感賞を授与



アトラクション
(別府市立青山中学校合唱部による合唱)



審査委員会



最優秀賞を受賞した島村音羽さんの発表

別府で少年の主張県大会



最優秀賞を獲得した島村音羽さん＝29日、別府市上田の湯町の市中央公民館

島村さん最優秀賞

第47回少年の主張県大会が29日、別府市上田の湯町の市中央公民館であった。中学生が生活で感じた疑問や考えを自分の言葉で訴えた。最優秀賞には島村音羽さん(14)＝竹田3年Ⅱの「逃げた先に見えた夢」が輝いた。

県青少年育成県民会議と国立青少年教育振興機構の

主催。本年度は県内22校の1521人から応募があり、校内選考、書類審査を通過した10人が発表した。別府大短期大学部初等教育科教授の内海真理子審査委員長ら5人が審査した。島村さんは、完璧を求めすぎて体調を崩した小学生時代の体験を発表した。「逃げる」とは悪くない」とい

う母親の言葉に救われ、人の気持ちに寄り添うようになったことや、薬剤師になることを将来の目標としていることなどを話した。大会に向け夏休み中も練習に励み、せりふに気持ちを込めることを意識したという。島村さんは「練習通りにできた」と笑顔で話した。県代表として九州ブロック審査に臨む。

その他の審査結果は次の通り。

- ▽優秀賞 小野ソフィヤ(別府市北部3年) 亀井美咲(臼杵市西3年) ▽優良賞 後藤葉日(別府市朝日3年) 中嶋葵生(佐伯城南3年) 小野凌佑(宇佐市院内3年) 明石結宇(大分豊府3年) 酒見華望(竹田3年) 蔵下祥貴(宇佐3年) 佐藤大樹(別府西2年) ▽県教育長賞 後藤葉日 ▽共感賞 明石結宇 (川野剛志)

令和7年度（第47回）「少年の主張大分県大会」実施要綱

- 1 目 的 中学生が日常生活等で考えていることを広く社会に訴える機会を提供することにより、広い視野と柔軟な発想や創造性を養い、物事を論理的に考える力や豊かな表現力などを身につけさせ成長を促すとともに、青少年の健全な育成に対する県民の理解と関心を深める。
- 2 主 催 大分県青少年育成県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 3 共 催 大分県・大分県教育委員会
- 4 後 援 別府市・別府市教育委員会・別府市青少年育成市民会議・大分県市町村教育委員会連合会・大分県中学校長会・大分県中学校文化連盟・大分県教職員組合・大分県PTA連合会・大分合同新聞社・NHK大分放送局・OBS大分放送・TOSテレビ大分・OAB大分朝日放送・エフエム大分・J:COM大分ケーブルテレコム
- 5 応募対象 県内の国・公・私立の中学校、義務教育学校及び特別支援学校中学部に在籍する生徒（国籍不問）
- 6 開催日 令和7年8月29日（金） 13時30分～16時30分
- 7 開催場所 別府市中央公民館
- 8 実施内容
 - ① 発表内容
 - ア 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など
 - イ 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど
 - ウ テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など上記のような内容で、心からの思いや考えたこと、感銘を受けたことなどについて、少年らしい自由かつユニークな発想で、飾り気のない言葉を使ってまとめたもの
 - ② 発表時間 1人5分程度とし、日本語で発表できること
 - ③ 発表者 審査の結果、選出された10名
 - ④ 表彰 県大会発表者の中から、最優秀賞（1名）、優秀賞（2名）、優良賞（7名）に賞状と副賞（盾等）を贈呈。特別賞として大分県教育長賞（1名）、共感賞（1名）に賞状と副賞（盾等）を贈呈。また、佳作受賞者には、県大会終了後賞状を贈呈。
 - ⑤ 全国大会 最優秀賞受賞者は、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催し、令和7年11月16日に東京都で開催される「少年の主張全国大会」に大分県代表として参加する。さらに、事前の審査で九州ブロック代表（2名）に選出された場合は、全国大会に出場し、発表する。
- 9 問合せ先 大分県青少年育成県民会議事務局（大分県生活環境部生活環境企画課内）
〒870-8501 大分市大手町3丁目1番1号
電話 097-506-3080

「少年の主張大分県大会」審査基準

【最優秀賞・優秀賞・優良賞】

次の4項目について、各項目ごとに審査（採点）し、その合計得点（審査委員1名あたり50点満点×5名=250点満点）を基に協議し、各賞を決定する。

① 論旨（20点）

- ・ 自己の意見・希望など論旨が一貫していて、明瞭であるか
- ・ 批評でなく、自らが現状を改善していく姿勢が出ているか
- ・ 中学生らしい新鮮な発想や柔軟な創造性があるか

② 構成（10点）

- ・ 感動や共感を与える内容の濃さや構成の工夫があるか
- ・ 体験談等の主観的要素と広い視野等の客観的要素のバランスは良いか

③ 表現・話し方（10点）

- ・ ことばが明瞭で、聞き取りやすいか
- ・ 論旨や伝えたいことを上手に表現できているか
- ・ 感情や感性が伝わる抑揚があるか（演技過剰や棒読みではないか）
- ・ 話し方に熱意や迫力が感じ取れるか

④ 発表態度（10点）

- ・ 少年少女の代表にふさわしい品位があるか
- ・ 制限時間を守り、かつ時間を有効に使えていたか
- ・ 観客席を向いて話せているか（原稿を演台に置くのは許可している）

【県教育長賞】

- ・ 前述の審査基準とは別に、審査委員からみて「日常の出来事や身近なテーマから、他の中学生とは異なる視点で物事を捉え、斬新な見方や考察を加えた意見」を発表したものに授与する。

※優劣や技術だけでは測れない、「光る個性」を評価する。

【共感賞】

- ・ 中学生審査委員全員で協議して、「最も共感した」ものに授与する。
- ・ 他の賞との重複受賞も可とする。



大分県青少年育成県民会議

〒870-8501 大分市大手町3丁目1番1号
大分県生活環境部生活環境企画課内
TEL(097)506-3080